

第 2 部

調査事例資料集

1 仙台市青年文化センター

自発的アウトリーチを生み出す
市民育成事業

1. ホールの概要

- 開館年： 1990年
運営母体： (財)仙台市市民文化事業団
都市人口： 100万6千人
- 施設全体の延床面積： 25,064m²
- コンサートホール： 804席
シアターホール： 588席
交流ホール： 210～300席
エッグホール： 80～100席
リハ-サル室・練習室： 4室 / 約364m²
- 管理時間： 9:00～22:00
休館日： 年末年始、施設点検日(月2日間・不定期)
- 運営スタッフ総数： 25名
(非常勤含)
企画系スタッフ数： 7名
芸術普及担当者： 兼務
(企画系スタッフ数、芸術普及担当者数は内数)
- 所在地・連絡先：
〒981-0904 仙台市青葉区旭ヶ丘3-27-5
tel. 022-276-2110
fax. 022-276-2108

2. ホールの特色、事業概要

- 発展途上で新しい芽を持っているという青年の特徴を考え、単なるホールではなく、青年の新しい文化創造の場、青年の発表の場、交流の場、広い地域の仲間が集う場、地域文化の交流の場、文化伝播の場とすることを施設の設置目的とし、その施設目的にあわせた施設設計がなされている。
- 自主事業数： 23本(1999年度)。
- ホール稼働率： コンサートホール：85.1%

シアターホール：89.3%

- 自主事業予算： 4,064万円
芸術普及予算： 1,074万円
(上記自主事業予算の内数)

3. 芸術普及活動導入の背景、経緯

- 「青年の文化活動および交流の場」として設置された施設であり、この設置目的を達成するため、青年をはじめとした市民が個性豊かに生き生きと活動できる文化環境を整えるとともに、将来の文化活動の担い手となる人材の育成、支援を重視している。
- 施設目的に添って、すべて「市民参加型」の事業として展開している。事業の実施にあたっては、常に市民に対して、舞台への参加、裏方への参加を働きかけており、これが同ホールの芸術普及活動の考え方となっている。
- このため、一過性の鑑賞型イベントではなく、極力市民参加の手法を取りいれながら、「全事業市民参加型」の事業展開を目指している。

4. 芸術普及活動の内容と運営

◎ 芸術普及活動の構成と内容

- 事業は、仙台市からの受託事業(青年文化交流事業)と、(財)仙台市市民文化事業団の主催事業に分かれており、この2つの相乗効果を狙っている。
- それぞれの事業は、演劇、美術、映像、クラシック音楽といったジャンルを明確にし、かつ多くの若者が関心を持つよう組み立てている。
- 市からの受託事業は、地元アーティストへの創造・発表・交流機会の提供、講座や各種ワークショップなど育成事業の実施、実行委員会の組織化等による企画段階からの市民参加、



「フォトワークショップ」募集要項
(2000年度)

- 市民団体とのパートナーシップ、市民ボランティアとの協働の5つを重点事項としており、大きくは参加型事業と育成型事業の2つに分けられる。
- 参加型事業は主に出演・出展型の事業で、
 - 「ユースヴィジュアル展」(市内アーティストによる公募展)
 - 「おすすめ自主映画館」
 - 「ユースクラシックコンサート」(コンテスト形式のクラシック音楽の演奏会)
 - 「ライトミュージックフェスティバル」(コンテスト形式の市内バンドの演奏)
 - 「バレエ & モダンダンスフェスティバル」(バレエ、モダンダンスの合同公演)
 - 「クリスマスファミリーコンサート」
 - 「民俗芸能のつどい」
 等の事業を実施している。
 - 育成型事業では、
 - 「フォトワークショップ」(簡易機能カメラによる写真のワークショップ) *表参照
 - 「音楽スタジオ講座」・「PA ステージマン講座」(音響、舞台音響の講座) *表参照
 - 「ダンスワークショップ」
 等の事業を実施している。
 - 財団主催事業は、芸術鑑賞振興事業と舞台芸術振興事業に分けることができる。
 - 芸術鑑賞振興事業は、仙台市から受託している青年文化交流事業を補完する発想で組み立てられており、
 - 「ユースシネマフォーラム」(「ユースヴィジュアル展」を補強するための事業)
 - 「ユースクラシックウィーク スペシャルゲストコンサート」(「ユースクラシックコンサート」を盛り上げるための事業でトーク付きのコンサート)
 を実施している。
 - 舞台芸術振興事業は、1997年度から舞台技術者の育成、演劇分野の重点振興を目的とした「劇都(ドラマティックシティ)仙台」事業として、「演劇ワークショップ」、「演劇プロデュース公演」、「仙台演劇祭」の3事業(*表参照)を実施している。
 - これらは、もともと青年文化交流事業として実施していたが、参加者が多く非常に盛り上がったため、財団で別メニュー化した。演劇の専門人材育成事業や地元アーティストの発掘の場として、市民参加と公演の中間的位置づけを担っている。
 - また、当事業団の他のセクション(事務局、エルパーク仙台)との連携で専門技術者を養成するため、「舞台技術セミナー」(エルパーク仙台)、「舞台技術アカデミー」の2事業も実施。
 - これらの事業はいずれも、青年の参加・育成を促すための独自の事業だが、仙台市からの受託事業の中の育成型事業と、財団主催の舞台芸術振興事業が、特に芸術普及的要素の多い活動といえる。
- ◎ アーティストとの関わり
- 在仙演劇人との連携
- 「仙台演劇祭」は、公募による地元劇団公演を中心に、ボランティアが在仙の演劇人を中心とした任意団体である「仙台演劇人フォーラム」と連携し、運営委員会を組織して行う事業。1998年度からは、この「仙台演劇人フォーラム」が関連イベントの企画から運営までを担っている。
 - こういった事業の効果から、1990年のスタート当初、約30であった仙台市内の劇団が、現在では70以上に増えており、年々演劇が盛んになっている。それとともに、自分たちの表現活動にしか興味がなかった劇団に、横のつながりが生まれた。
 - アーティスト側からも、アーティスティックな部分



左より「ニュースタリッシュコンサート」、ライトミュージックフェスティバル(オリジナルロック部門、ファンキヤナル部門)グランプリのCD(音楽スタジオ講座)で制作

◎ 主な芸術普及事業の概要

事業の名称(開始年度)	事業の内容(実績は1999年度)、課題や今後の展望										
演劇ワークショップ (1993年度)	<ul style="list-style-type: none"> 演劇界の次代を担う人材の発掘、育成および演劇支援層の拡大を図る。以下の3つのワークショップとクリニックから構成される。 「演劇ビギナーズワークショップ」:主に初心者を対象に、在仙の演劇人を講師に迎えて、演劇基礎講座、発声、ストレッチ等の基礎訓練から作品づくりまで体験するワークショップを行い、成果発表の場として試演会を開催する。期間は5～6月の20日間程度、定員15名程度。 「演劇ステップアップワークショップ」:演劇経験者を対象に、秀作戯曲を題材としたプロの演出家による演技実技が中心のワークショップ。期間は、6～7月の15日程度、定員15名程度。 「演劇クリニック」:演劇経験者を対象に、「音声」「身体表現」「制作」等個別の分野について、専門家の指導する2～3日程度の集中講座。 予算や人員等の面で、俳優訓練と演劇の理解者・支援者を育てる事業をビギナーズワークショップ1本の中で行わざるを得ないのが課題。 過去の受講生が講師に登用されたり、別事業の演劇プロデュース公演への抜擢など、人材の蓄積や活用が図られていることが大きなメリット。 <table border="1"> <thead> <tr> <th>対象</th> <th>参加者数</th> <th>実施頻度</th> <th>参加料</th> <th>予算規模</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>一般市民</td> <td>30名</td> <td>不定期</td> <td>¥5,000</td> <td>300万円</td> </tr> </tbody> </table>	対象	参加者数	実施頻度	参加料	予算規模	一般市民	30名	不定期	¥5,000	300万円
対象	参加者数	実施頻度	参加料	予算規模							
一般市民	30名	不定期	¥5,000	300万円							
フォトワークショップ (1996年度)	<ul style="list-style-type: none"> 写真の鑑賞・撮影、写真展の開催、写真集の作成まで、写真に関する要素を包括的に体験することにより、写真愛好者の裾野を拡大する。 簡易機能のカメラを使用したモノクロ写真のワークショップを実施。講師は在仙のプロの写真家に依頼。 これまで4冊の写真集を発行、カメラ雑誌に取り上げられるなど、好評。 過去5年とも、前回は大きく上回る応募があった。 <table border="1"> <thead> <tr> <th>対象</th> <th>参加者数</th> <th>実施頻度</th> <th>参加料</th> <th>予算規模</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>一般市民</td> <td>70名</td> <td>月1回程度</td> <td>¥5,000</td> <td>70万円</td> </tr> </tbody> </table>	対象	参加者数	実施頻度	参加料	予算規模	一般市民	70名	月1回程度	¥5,000	70万円
対象	参加者数	実施頻度	参加料	予算規模							
一般市民	70名	月1回程度	¥5,000	70万円							
音楽スタジオ講座、PA ステージマン講座 (1992年度)	<ul style="list-style-type: none"> 録音、PA など音響技術習得の場を提供し、音響技術者の育成を図り、市民のさまざまな音楽活動を支えるための環境づくりを行う。 「音楽スタジオ講座」:本格的な録音機器を使用、マスターテープ制作までの一連の過程を学ぶ。「ライトミュージックフェスティバル」や「ニュークラシックコンサート」等の優秀演奏者のCD制作が題材。 「PA ステージマン講座」:「ミュージックアライブ」事業の実際のコンサートを題材に仕込みから本番、ばらし、積み込みまでを経験する実践講座。 講師に負担がかかることが課題。 将来的には受講生による NPO 的グループが生まれることを期待。 <table border="1"> <thead> <tr> <th>対象</th> <th>参加者数</th> <th>実施頻度</th> <th>参加料</th> <th>予算規模</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>一般市民</td> <td>20名</td> <td>不定期</td> <td>¥1,000～¥3,000</td> <td>280万円</td> </tr> </tbody> </table>	対象	参加者数	実施頻度	参加料	予算規模	一般市民	20名	不定期	¥1,000～¥3,000	280万円
対象	参加者数	実施頻度	参加料	予算規模							
一般市民	20名	不定期	¥1,000～¥3,000	280万円							



「クリエイションルーム」

- アーティストとのつながりを活し、学校や地域へのアウトリーチも可能だが、すでに、劇団の中には、独自の活動として地域のコミュニティセンター等でプログラムを実施しているところもある。
- クラシック音楽等の分野では、中学校の学区ごとに設置された市民センターで、生涯学習の一環として芸術団体によるワークショップが行われている。仙台市内には、約60の市民センターがあり、演劇、ダンス、音楽の講座も持たれているため、既存の活動とすみわけをしている部分もある。
- こういった活動の広がりや、ここ5～6年でできたもので、表現者が非常に自由で囚われない発想を持っているから生まれてきたもの。本年度は「仙台演劇祭」とは別に、自分たちで演劇祭を立ち上げた。
- ホール側は、アーティストの活動を市民に周知することも大切な役割であると考え、マスコミ各社に取材・記事掲載の依頼をすることで、活動をサポート。仙台市が年2回発行、全戸配布する「グラフ仙台」にも掲載。

◎ 劇評モニター

- 現在、演劇批評の不在が問題になっている。東京の四大紙でも演劇に対する紙面は狭く、劇評も一般的ではない。そういった現状のもと、批評の環境を作ろうと1997年度から、プロの演劇評論家に指導を仰ぎ、専門人材育成事業として劇評を始めた。
- 現在では、ここから育った劇評モニターが中心になって「仙台劇評倶楽部」ができています。
- その結果、地元劇団が「仙台劇評倶楽部」に劇評を頼んだり、「仙台演劇人フォーラム」では劇評をインターネットのホームページで公開するなど、交流が進んでいる。劇評の存在で、劇団側も見られるという意識が高まり、劇評を行う側も演劇の見方、文章の書き方など磨きをかけ

ている。

- 劇評誌は財団の発行だが、劇評は非常に個人の人間性が出るものであり、掲載にあたっては、過度に個人の自己主張にならないよう配慮してもらうなど、難しい面もある。
- #### ◎ ボランティアとの関わり
- 仙台市では、平成7年、若い音楽家のための「チャイコフスキー国際コンクール」でボランティアを採用して以来、文化事業に積極的に活用するようになった。
 - 本センターでは、市民ボランティアとの協働はホールの重点事項で、協力ボランティアを事業ごとに募集している。事前研修を行う場合もあるが、特に登録制度やサポート組織にはしていない。
 - ボランティアの活動の場として、「クリエイションルーム」を開放している。「クリエイションルーム」は、さまざまな事業に関わるボランティアのほか、出演者、地元演劇人など誰もが自由に入りし、AV 機器や編集用機器、コピー機等で作業ができるようにしている。自由な活動ができるよう、各自自己管理の原則に基づいて利用している。
 - このクリエイションルームは、さまざまな人とジャンルを越えた交流ができる「溜まり場」として機能しており、自主的なコミュニケーションが生まれている。

5. 芸術普及活動の効果、今後の課題と展望

◎ 芸術普及活動の実施に伴う効果

- 前述したとおり、市内の演劇団体独自の動きが出てきていること、劇評モニターでの交流が行われていること、ボランティアや講座受講者相互の自主的な連携が行われつつあることが、10年間行ってきた一連の芸術普及活動に伴う効果。
- 「音楽スタジオ講座」、「PA ステージマン講座」

では、受講生の OB を中心にグループを作り、アマチュアバンド等への支援を実費程度で実施。

- これら効果は、ここ5年程で出てきたもので、事業は長期的視点に立った継続性が不可欠。

◎ 課題と今後の展望

- ホールの事業では、学校とは別の、さまざまな価値観に触れられるということが大きなメリット。もう一つ、ホールの担う大きな役割は、「ライブ」の良さを伝えること。本ホールは、青少年の育成を目的としているので、子どもを対象にした事業ができるかどうかはこれからの課題。
- ホールの役割は、芸術文化をツールとした関係性をつくること。それは、鑑賞事業かもしれないし、舞台に立つことで分かち合う共感かもしれない。とにかくジャンルを超えた新しいコラボレーションの場面づくりをすること。
- 現実的に直面しているひとつ目の課題は、観客の開拓。ホールに来ない観客の開拓の部分がおいてきぼりになってしまった部分がある
- 二つ目の課題は、市民参加型事業の質。市民に鑑賞の機会が増えており、見る目も養われているので、事業の質が集客の大切な要素になっている。
- 三つ目の課題は、テーマ性を持たせた集客のしくみづくり。「いかに人をステージに立たせるか」と「いかに観客を育てるか」の間に相乗効果を生むような事業のしくみづくりが必要。
- 市の財政が厳しいおり、なぜ文化事業を公共が担うのかを踏まえていかないと予算はつかない。そのためにも、こういった事業でこれだけの地域還元が実現しているということを提示していく必要がある。
- そのため、定量的ではない評価軸を訴えながら、動員数など数値で示すことのできる部分にも配慮している。
- 文化は人だと言われることで、人材育成に予算がつく。まちは人がつくるものであり、結局都市政策は人づくりである。感性豊かな人々が輩出されることで、人々の間に、このまちに住み続けたいという希望が出てくる。このまちに住み続けたいという共感形成ができる環境づくりをすることがホールの役目。
- 市の方針に芸術文化の振興が謳われていることが、芸術普及活動の推進を後押ししている。
- 30年、50年先のまちづくりを考えた種蒔きが、芸術普及活動である。